

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520013

研究課題名（和文） アリストテレスの「エネルゲイア」概念の形而上学における現代的意義の研究（II）

研究課題名（英文） Aristotle on the energeia and its metaphysical meanings in our times (II).

研究代表者 高橋 久一郎（TAKAHASHI KYUICHIRO）
 千葉大学・文学部・教授

研究者番号：60197134

研究成果の概要（和文）：

1) 現代の心の哲学において「エネルゲイア」概念が果たしうる役割とその関連性について再考し「魂の発見——いつ、誰が、そしていかにして」（岩波講座哲学5『心・脳の哲学』所収）として纏めた。2) 2008年度の哲学会におけるシンポジウム「価値と実在」において、倫理学において論じられている価値の実在性について、通常、主観的であるとされる「善」がむしろ客観的であり、個人における善のあり方を制約するとされる「正」の方むしろ「契約論的な構成」である可能性を示唆した。

さらに、20年度後半にはアリストテレスの『分析論後書』の翻訳を開始し、その荒訳を作成し、21年度を通じて検討した。

研究成果の概要（英文）：

In the former half of this project I have re-examined and argued for the relevance of Aristotle's concept of the 'energeia' in those problems of contemporary philosophy of mind, about which I have published in 'The Discovery of Mind--When, By whom and How--', in *Iwanami Koza Philosophy 5*(2008).

At the symposium on Values and Reality held at Tokyo University I argue that contrarily to the appearance the value of good is rather objective, while rights are dependent on human will and constructed by some contracts.

I made a full translation of Aristotle's Posterior Analytics, in which Aristotle develops a theory of Demonstrative Science(episteme) with a general plan of forming a comprehensive framework of enquiry.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：エネルゲイア、機能、ヘクシス、実体、知識、

1. 研究開始当初の背景

私はこれまで、本研究に先立つ三回にわたる科学研究費助成金によって、アリストテレスの「エネルゲイア」概念の現代的意義についての研究を行ってきた。それぞれ、「行為論」「心の哲学」「形而上学」における「エネルゲイア」概念の意義について検討を試みたものである。その成果は、それぞれ、平成10年（課題番号07610001）、13年（課題番号10610005）、19年（16520007）に提出した報告書にまとめられている。

本研究は、当初、「形而上学」における意義について、さらに検討を加えることを目的として、形而上学における意義の研究の(II)として構想された。

それは、前回の研究が「宇宙論的目的論」という場面における「エネルゲイア」概念の検討を最終的な課題としながら、それに先だって、「感覚」と「理性」のエネルゲイアを検討した「心の哲学」における研究を補う形そうしたエネルゲイアにある意味では先立つ「ヘクシス（性向）」について検討することになったためである。

2. 研究の目的

アリストテレスの「エネルゲイア」概念の行為・心の哲学、そして形而上学などにおける現代的な意義を検討する一連の継続研究の一部として、本課題は、形而上学、そりわけ目的論における意義を明らかにすることを目指して開始した。

3. 研究の方法

本研究は、先立つ研究においてもそうであったように、一貫して、文献学的研究を主としながらも、現代における問題と交錯するす

る場面でアリストテレスの議論を検討するという立場を取っている。

4. 研究成果

初年度は、「アリストテレスの「エネルゲイア」概念の形而上学における現代的意義の研究（I）」として纏められた前回の研究の確認と、研究成果アリストテレスの目的論の現代的意義の検討に向けての予備的研究を行った。そして、これまでの研究の振り返り、とりわけ「心の哲学」における目的論の確認の上に、その成果を論文「魂の発見」にまとめるとともに、心の問題とわれわれの知識のあり方に関する問いとして展開する準備をした。

アリストテレスは「心は身体の形相である」とし、さらに、心と身体は「エネルゲイア・デュナミス」の関係にある」とするが、この関係をさらに説明すること、少なくとも、何らかのより基本的な関係に還元的に基礎づけることによって説明しようとはせず、例示をあげることで類比的に理解すべきであるとしている。このことから、ある種の論者は、「エネルゲイア・デュナミス」関係への論究は心身問題の解決に繋がるものではなく、むしろトリビアルであると解している（それはまた、アリストテレスが徳性を「中庸」として規定していることについてなされる評価でもある）。

確かに還元的な説明ではないことは認めなければならないが、トリビアルであるという見かけについては私はかつて、「エネルゲイア・デュナミス」論は、いわば「歴史なしの進化論」という考え方のもとに、心を身体内に埋め込まれた「性向」とすることで、ある種の素朴な「物理主義」のもとでの有力な

研究プログラムを示すものであるとし、さらに、哲学的には積極的に「静寂主義」を示唆するものであると論じた。

今回の研究では私は、アリストテレスはある種の「静寂主義者」ではあるが、i)事象の説明において「実体」の先行性の主張が示しているように、説明の順序を無視する「蒙昧主義者」ではないことを確認し、その上で、物理主義と対立しているように見えながら、むしろある種の「物理主義」的な探求プログラムであること、ii)心の最も高度なエネルギーである理性がわれわれの実体であり、しかも、iii)知るものである理性のエネルギーと知られるものである実体のエネルギーが同一であるとされている限りで、形而上学における実体の問題はわれわれの心のエネルギー、つまり理性についての問題であること、したがってまた知識のあり方についての問題であることを示した。

また、平行するかたちで、目的論が問題となる場面の一つである「行為」についての倫理的判断（の客観性）が自然科学的な世界理解の中にどのように納まりうるのかという、近年の倫理学の分野での重要なトピックについても検討した。

われわれが行う倫理的判断において、「善」と「正」という概念の果たす役割はかなり異なっている。例えば、リベラリズムの伝統においては、「善」という価値と「正」という価値は区別され、一般に前者は「主観的」であるが、後者は「客観的」、あるいは、少なくとも前者を「制約する」という関係にあると考えられている。この見かけに反し、一方では、「善」は、進化論的背景を持って、「利益」を核とする何らかの自然的性質に付随し、客観的であるだけでなく、われわれの認識とは独立した「実在」する世界のあり方についての記述的判断であると考え余地

のあること、しかし、「正」については、客観的であるとしても、われわれと独立した世界のあり方についての記述とすることは困難であること、他方では、前者が人間だけでなく生物一般についても適用される概念であるのに対して、後者は極めて人間のあり方に関するものであるということに着目し、にもかかわらず、「善」は、自然な仕方では「無生物」には適用されないのに対して、「正」は、人間に意志に依存し、何らかの契約によって成立し、それゆえに、「善」の利益を享受する主体ではない無生物にさえ帰属することから、その身分については、さらに入念な検討の必要があること、を、哲学会におけるシンポジウム「価値と実在」の提題で論じた。

アリストテレスにおける形相と質料の関係がエネルギー・デュナミス関係にあるとされることの形而上学的意義をどのように理解するかという課題が、このようにして、心の哲学と知識論、さらには善の実在性についての倫理学的問題とも関わっていることの確認の上に、現代の物理主義的世界理解と対比と対話しつつ、21年度には研究の集約を試みる予定であった。

この作業は、2011年より新たに刊行される予定の『アリストテレス全集』（岩波書店）に所収されることになる『分析論後書』の翻訳を依頼されたこともあって、最終年度である21年度には、当初の研究計画の完結を計るというよりは、昨年度後半に引き続き、エネルギー論と間接的に関わることになるアリストテレスの知識論について、形而上学的背景を検討しながら、『分析論後書』の翻訳と注解、そして解説の作業を中心に行った。

アリストテレスは『分析論後書』において、探求についての一般的な枠組みを示すとい

う計画のもとに「論証的知識（エピステーメー）」についての理論を展開している。この理論において、論証は、いわゆる「正当化」の方法であるだけでなく、「発見」の方法として構想されている。

探求の対象は「中項」であり、これが、あることがらXを、まさにそのことがらXにしていることがらである。こうしたXは、i)種・もしくは類といった実体、ii)そうした実体の固有の性質、iii)そうした性質に関わる固有の性質である。成功した探求においては、論証に関わる三つの項は、主述を交換できる。

論証的な知識において、それについて論証が、すなわち、知識が成立するのは、「種」である場合に限らず、むしろ一般には「類」について成立する。このためには、「類」がいわば「自然種」をなしていることが不可欠である。そこで、アリストテレスにおけるいわゆる「知識論」の課題は、論証的な知識が成立することになる「類」を、むしろ結果である「それが論証される」ということを「手がかり」にして見いだすということにある。

このために不可欠のアリストテレスの重要な論点は、いわば、外延においては同じであるが内包においては異なることらについて、それらを主述とする言明は真である場合においても、その成立については「原因・説明」の順序があるという論点である。これはプラトンの『エウテュプロン』における、「敬虔であること」と「神々に愛されること」との関係についての議論を受け継ぎ、さらに、推論関係の内に位置づけることを試みたものである。

翻訳作業にともなう研究の成果は、訳書の「解説」として公刊する予定であるため、未だ公表しては居ないが、エネルゲイア論との関わりでの、アリストテレスの一つの注目す

べき論点として、アリストテレスのいう「知識（エピステーメー）」、つまり「論証的な知識」が、エネルゲイアにあると位置づけられる「種」実体概念ではなく、むしろ可能態にあるとされる「類」を核として、構成されていることを確認したことは意義あることであると考えている。

知識がこうしたあり方をしているということは、アリストテレスにおいては、少なくとも、伝統的には対比的に考えられてきた、いわゆる「帰納」と「演繹」の関係もまたダイアレクティカルな関係にあることを示唆するものであり、このことは、現代的なコンテキストにおいても、それ自体としても検討するに値する課題として浮かび上がってきた。

先に記した事情から、本年度の成果については公刊していないが、翻訳の暫定版については、連絡いただければ、配布する。

(taka@l.chiba-u.ac.jp)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計 1件)

①高橋久一郎(単独) シンポジウム「価値と実在」哲学会大会提題(招待 他の提題者 神崎繁) 2007年10月26日 東京大学

〔図書〕(計 2件)

①高橋久一郎(単著)「看護における価値観の問題—インフォームド・コンセントという視点から」『日本文化型看護学への序章』2008年 pp.141-146. 千葉大学看護学研究科

②高橋久一郎(単著)「魂の発見」岩波講座『哲学』5『心・脳の哲学』2008年 pp.21-42. 岩波書店

〔その他〕

①高橋久一郎(編著)『哲学的自然主義の諸相』千葉大学人文科学研究科研究プロジェクト報告 2008年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋久一郎 (千葉大学・文学部・教授)

研究者番号：60197134

(3) 研究協力者

今井知正 (東京大学)

荻野弘之 (上智大学)

荻原 理 (東北大学)

金山弥平 (名古屋大学)

河谷 淳 (駒澤大学)

神崎 繁 (専修大学)

坂下浩司 (南山大学)

千葉 恵 (北海道大学)

中畑正志 (京都大学)

新島龍美 (九州大学)

納富信留 (慶應大学)

朴 一功 (大谷大学)

渡辺邦夫 (茨城大学)